

鉢伏山北東麓遺跡群・菊塚古墳発掘調査報告書

～善通寺市内遺跡発掘調査事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 6～

2001年 3月31日

善通寺市教育委員会

序

善通寺市は古代から繁栄した土地柄から、丘陵部、平野部いたるところに様々な遺跡が残っております。教育委員会では過去の記録などから遺跡台帳を整備しておりますが、これまでに遺跡が発見された記録が無いような場所でも開発等により新たな遺跡や遺物が発見されるることは珍しくありません。

そこで教育委員会では平成4年度から文化庁の補助を受けて、開発等が予想される地域の埋蔵文化財の所在や範囲、またその性格等を明らかにし、その適切な保護のための基礎的な資料を得るための調査を実施しております。

平成12年度は市の南東部に所在する鉢伏山の北東山麓部から水田地帯と、市街地南西部の丘陵部に所在する菊塚古墳の周辺において6回目の埋蔵文化財調査事業を実施いたしました。

前者ではこれまでに埋蔵文化財の存在は知られておりませんでしたが、「多目的屋外競技場」と「市民ふれあい公園」の事業が広大な土地に計画されておりますために、試掘調査を実施いたしました。

後者は古くから広い馬場を有する前方後円墳であることは知られておりましたが、後円部以外は破壊されており詳細は全く知られておらず、近年周辺で実施されているは場整備に対応するための試掘を古墳周辺で実施いたしました。

貴重な文化遺産を正しく理解し、後世に伝えるためにはこのような調査や資料の蓄積が欠くことのできない作業となりますので、皆様のご理解とご協力を切にお願い申し上げます。

また、この度の発掘調査事業にあたり、ご協力を賜りました地権者の皆様や関係機関の方々、そして報告書刊行にあたり、ご指導ご助言を賜りました諸先生各位に厚くお礼申し上げますとともに、発掘調査に携わられた皆様のご苦労にも心から感謝申し上げます。

平成13年3月31日

善通寺市教育委員会
教育長 勝田英樹



例　　言

1. 本書は善通寺市教育委員会が国庫補助事業として実施した埋蔵文化財調査事業（善通寺市内遺跡発掘調査事業）の発掘調査報告書である。
2. 本事業では善通寺市与北町鉢伏山北東麓（鉢伏山北東麓遺跡群）において平成12年5月18日から同月29日まで、善通寺市善通寺町字大池東（菊塚古墳）で平成12年6月12日から同年7月18日まで発掘調査を実施し、現地での調査終了後、両遺跡の調査資料と出土遺物の整理作業を実施した。
3. 本書の編集作業は善通寺市教育委員会 文化振興室 課長補佐 笹川龍一が行った。各遺跡の実測や周辺部の測量調査、写真撮影は四国学院大学考古学研究部の協力を得て後川が行った。また、本書に掲載した遺物の実測は片桐節子の協力を得た。
4. 本事業実施及び本書の編集にあたっては、次の方々・機関より多大なご指導・御援助並びに資料提供、助言を得た。記して謝意を表します。（敬称略・順不同）
(財)香川県埋蔵文化財調査センター・高畠精一、原 春男・入江秀信・安井英行・片桐孝浩
四国学院大学考古学研究会
調査参加者 石村 守・蓬沢 進・土井誠宜・松林 潤・平山 貞・中村大地・名嘉間朝日
蜂谷浩美・中山大輔・黒田 豪・郷川大介・宮田仁智・名本憲弘

目　　次

第一章 遺跡周辺の地理と歴史	4
第二章 鉢伏山北東麓遺跡群	11
①丘陵部での調査概要と遺構及び遺物	11
②山麓部での調査概要と遺構及び遺物	16
③小　結	18
第三章 菊塚古墳	20
①調査の概要と遺構及び遺物	20
②小　結	26
図　版	27
抄　録	35

挿　図　目　次

第1図 善通寺市遠景	4
第2図 調査地と周辺の主要遺跡	7
鉢伏山北東麓遺跡群	
第3図 丘陵部の地形及びトレンチ配置図	11
第4図 第1・2トレンチ平面図及び土層実測図	13

第 5 図	第 3・4 トレンチ平面図及び土層実測図	14
第 6 図	丘陵部表採石器実測図	15
第 7 図	丘陵部表採須恵器実測図	15
第 8 図	山麓部の地形及びトレンチ配置図	16
第 9 図	第 5・6・7 トレンチ土層実測図	17
第 10 図	第 5 トレンチ出土弥生土器実測図	18
菊塚古墳		
第 11 図	菊塚古墳及び周辺地形及びトレンチ配置図	20
第 12 図	菊塚古墳周辺主要古墳位置図	21
第 13 図	第 1 トレンチ南東端畦状遺構平面図	22
第 14 図	第 1・2 トレンチ平面及び土層実測図	23
第 15 図	第 1 トレンチ出土弥生土器実測図	24
第 16 図	SX-01(砂糖甕)実測図	24
第 17 図	第 3・4 トレンチ平面及び土層実測図	25
第 18 図	第 5 トレンチ平面及び土層実測図	25
第 19 図	第 6 トレンチ土層実測図	26
第 20 図	後円部南西側断面図	26

写 真 図 版

鉢伏山北東麓遺跡群

第 21 図	鉢伏山北東麓遺跡群(尾根部)調査地全景(北東から)～調査前の状況～	28
第 22 図	第 1 トレンチ掘削作業風景(北から)	28
第 23 図	第 1 トレンチ完掘状況(南東から)	29
第 24 図	第 2 トレンチ完掘状況(南東から)	29
第 25 図	第 3 トレンチ完掘状況(北西から)	30
第 26 図	第 4 トレンチ完掘状況(南から)	30
第 27 図	第 4 トレンチ SX-01 検出状況(北から)	31
第 28 図	鉢伏山北東麓遺跡群(山麓部)調査地全景(北から)～調査前の状況～	31
第 29 図	第 5 トレンチ掘削作業風景(西から)	32
第 30 図	第 5 トレンチ完掘状況(東から)	32
第 31 図	第 6 トレンチ完掘状況(南から)	33
第 32 図	第 7 トレンチ完掘状況(北西から)	33
菊塚古墳		
第 33 図	第 1 トレンチ掘削作業風景: 南東側周底部(南西)から後円部を望む	34
第 34 図	第 1 トレンチ完掘状況(南西から)	34
第 35 図	第 1 トレンチ南東端の畦状遺構検出状況と第 2 トレンチ(北西から)	35
第 36 図	第 1 トレンチ SX-01: 砂糖甕検出状況(南西から)	35
第 37 図	第 3 トレンチ完掘状況(南から)	36
第 38 図	第 4 トレンチ完掘状況(南から)	36
第 39 図	第 5 トレンチ完掘状況(南から)	37
第 40 図	第 6 トレンチ完掘状況(南東から)	37

第一章 遺跡周辺の地理と歴史

善通寺市は香川県西部の内陸部に位置し、真言宗開祖の弘法大師(空海)が誕生した土地として有名な田園都市であり、総本山善通寺の門前町として発達している。

東は丸亀市、西は三豊郡高瀬町・三野町、南は仲多度郡琴平町、北は仲多度郡多度津町と境を接している。

善通寺市周辺に広がる丸亀平野は、土器川や金倉川・弘田川の沖積によって形成された香川県下最大の沖積平野で、これらの河川による扇状地・氾濫原・小三角州などから形成されており、南から北に下るゆるやかな傾斜になっているため、たいていの場所から瀬戸内海や対岸の岡山を望むことができる。この河成沖積層の土壤は、下層土が灰褐色のマンガン結核を含む黄褐色砂質土層、表層70~80cmが強粘土質砂礫層で構成されており、通常弥生時代以後の遺構はこの下層上面に遺存している。この黄褐色砂質土層中には希に縄文土器片が含まれていることが知られていたが、近年実施された四国横断自動車道路建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査などによって、この土層は縄文時代後期から晩期にかけて堆積したものであることが確認されている。

また、善通寺市の北には讃岐の中世山城跡を代表する天霧城跡が山頂部に所在する天霧山、西から東にかけては、火上山・中山・我拝師山・筆の山・香色山が麓をつらねて並んでおり、五岳と呼ばれるこれらの山塊は、あたかも五枚の屏風をたてかけたようにそびえていることから、この山麓の地は屏風ヶ浦とも呼ばれ、当地の人々に親しまれ、古くから信仰の対象であったことが伺える。その南には、中山に連なる東部山・有岡の里を経て大麻山がそびえており、平地中には鶴が峰・磨臼山・如意山・鉢伏山・甲山などの小丘が散在している。

瀬戸内海の南岸に位置し気候と風土に恵まれた丸亀平野は、かなり古くから人間の文化が開けた土地であり、丸亀市の中ノ池遺跡・善通寺市の五条遺跡・善通寺市から仲多度郡にかけて広がる三井遺跡など、弥生時代前期から中期にいたる同時代の遺跡群が知られて



第1図 善通寺市遠景

背後の山は左端から大麻山・香色山・筆ノ山・我拝師山(この手前の小丘が甲山)・中山・火上山

る。中ノ池遺跡では環濠と想定される三重の大溝が検出され、弥生時代前期の古段階の特徴をもつ弥生土器を中心に、一部中期的様相を呈するものまで出土している。三井・五条遺跡では、遺構・遺跡の範囲などについては現在も全く不明の状態であるが、出土した土器片については、巣内第1様式の中段階から新段階に相当することが確認されている。

また、これらの遺跡群は自然堤防上に立地すると考えられており、現在の海岸線からの距離は2~3kmを計るが、当時の復元海岸線が現在の標高5mあたりと推定すれば、三井・中ノ池遺跡などは海岸部に形成された集落であることがわかる。そして、更にこれらの遺構が遺存する黄褐色砂質土層とこの下の洪積層の間には、縄文時代後期から晩期の生活痕が確認されている。また、四国横断自動車道路建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査によって、吉原町から旧石器も確認されており、現在のところ善通寺市の古代文化は約2~3万年前まで遡ることができるようである。

善通寺市街地の北一帯には香川県を代表する弥生時代の中核的な集落遺跡がある。西は篠の山の山裾から、東は四国農業試験場の敷地にまで及んでおり、ここがもと練兵場用地であったことから旧練兵場遺跡と呼ばれている。そして、ここから東には丸頭神遺跡・稻木遺跡・石川遺跡と続いているが、いずれの遺跡も近年までは本格的な調査は実施されておらずその詳細は明らかにされていなかった。

しかしながら、昭和30年頃の四国農業試験場の用地整備工事に伴って、弥生時代前期から後期にかけての小児墓棺十数点・多数の土器・石器類が出土したことや、県道の整備工事の際に国立病院のあたりから弥生土器に加えて須恵器や小玉などが出土したことなどから、遺跡は弥生時代のみならず、古墳時代にまで及んでいることが確認されている。

旧練兵場遺跡はこのように広い範囲に及ぶ可能性が強いばかりでなく、弥生時代前期から後期・古墳時代にかけての連続性が考えられる、県下でも例のない存在であることが知られている。ただ、最近の調査によってこの旧練兵場遺跡は幾つかの川道によって分断されていることが解り、旧練兵場遺跡群としてとらえた方が良いと考えられる。

この遺跡群でこれまでに数多くの発掘調査が実施されている。以下、主な調査を順に紹介する。総本山善通寺の西に流れる弘田川沿いで昭和52年に実施された善通寺西遺跡では、弥生時代後期から古墳時代にかけての用水路が検出され、多数の小型丸底壺・船の櫓や柱材などが出土しており、生活基盤である水田域の拡大が行われたことや古い溝の廃絶に伴う祭祀が行われたことが確認されている。続いて、昭和58年には遺跡群の東端部に所在する白鳳時代建立と考えられる善通寺の前寺・仲村庵寺(伝尊寺跡)の発掘調査が実施され、寺域の北端と、更にその下層では弥生時代中期から古墳時代にかけての遺構が検出された。

昭和59年には善通寺西遺跡から弘田川沿いの600m程下流に所在する彼ノ宗遺跡の発掘調査が実施されたが、ここでは約1,500m²の調査区から弥生時代中期から後期にかけての40棟以上の竪穴住居・小児墓棺墓15基・無数の柱穴と土坑群、古墳時代の掘建柱建物跡2

棟とそれに伴う水路、二重の周溝をもつ多角形墳の基底部などが夥しい生活の痕跡が確認されている。特に弥生時代終末期の竪穴住居からはその廃絶時の祭祀に用いられたと考えられる彷彿內行花文鏡片の懸垂鏡や銅鏡、多数の玉類が出土しており、この地区における弥生時代終末期の動向を推測する上で注目されている。昭和60年には彼ノ宗遺跡から東に約500m程の仙遊遺跡で弥生時代後期の箱式石棺と小児壹棺墓3基が発見されたが、この箱式石棺の石材には入れ墨を施した人面や鳥の絵の他、直弧文状の文様が一面に線刻されていたことから全国的な話題となった。

そして、国立病院や四国農業試験場などではこれまで頻繁に発掘調査が行われているが、いずれの調査でも住居跡が複合し密集した状態で遺存しており、正確な集落の規模は今も把握できていない。

また、ここから北方に広がる善通寺平野には、旧練兵場遺跡と同様に弥生時代の古い時期から古墳時代にかけての大規模な集落遺跡が幾つか知られている。まず旧練兵場遺跡から北方500mあたりには九頭神遺跡があり、ここでは昭和62年に都市計画道路改良工事に伴う発掘調査が実施され、弥生時代後期頃の竪穴住居や小児壹棺墓・箱式石棺墓等が確認されている。九頭神遺跡から東方500mあたりには弥生時代から古墳時代にかけての遺物が多量に散布することで知られる石川遺跡が広がるが、未調査のため詳細は不明である。

九頭神遺跡から北方に隣接する稻木遺跡では、四国横断自動車道路建設に伴う調査が昭和58年5月から昭和60年3月にかけて、また県道善通寺白方線改良工事に伴う調査が昭和61年度と昭和63年度の二回に分けて実施されており、やはり弥生時代から古墳時代にかけての竪穴住居群や墓地、中世の建物跡群などが確認されている。旧地形をみると、これらの築造跡群はいずれも旧河道と旧河岸の間に形成された微高地に營まれたものであり、これまでの調査結果からいずれも同時期に併存したものであることもわかる。従って弥生時代頃の善通寺周辺部には、「大集落」というよりはむしろ「小国」が誕生していたと考えた方が良いかも知れない。

また、善通寺市内からは与北山の神山遺跡で平形鋼劍3口、大麻山北麓の瓦谷遺跡で平形鋼劍2口・細形鋼劍5口・中細形鋼鉗1口の計8口、我孫師山遺跡では計3カ所から平形鋼劍5口・銅鐸1口、北原シンボバケ遺跡で銅鐸1口など、青銅器が数多く出土してお

1. 永井遺跡	9. 旧練兵場遺跡群	12. 齋賀古墳	20. 菊塚古墳	28. 大麻山根葉塚
2. 中ノ池遺跡	①彼ノ宗遺跡	13. 大塚池古墳	21. 北原古墳	29. 大麻山縦塚
3. 三井遺跡	②仙遊遺跡	14. 廬山山祭祀遺跡	22. 瓦谷1号墳	30. 猿山古墳群
4. 五条遺跡	③仲村廣寺(白鳳)	15. 寿日山古墳【史跡】	23. 御館神社古墳	31. 猿櫛城跡(中世)
5. 稲木遺跡	④善通寺西遺跡	16. 鶴が峰山頂古墳	24. 宮塚1-2号墳【史跡】	32. 仲村城跡(中世)
6. 石川遺跡	⑤善通寺御庭(奈良)	17. 鶴が峰4号墳【史跡】	25. 宮が峰3号墳	33. 甲山城跡(中世)
7. 九頭神遺跡	10. 矢ノ塚遺跡	18. 丸山古墳【史跡】	26. 野田浜古墳【史跡】	34. 天雞城跡(中世)
8. 甲山北遺跡	11. 下吉田神社古墳	19. 王墓山古墳【史跡】	27. 岡古墳群	35. 番色山城跡群

▲銅鐸出土地

■銅劍出土地

◆銅矛出土地

◎鉢伏山北東麓遺跡群(調査地)



第2図 調査地と周辺の主要遺跡

り、旧練兵場遺跡群や周辺部の遺跡群を本拠とした集団との関連も注目される。

やがて弥生時代に開始された稻作文化は完成期を迎え、丸龜平野という肥沃な生産基盤を背景に、独自の技術を持った特定の有力者が灌漑治水事業などを行い耕作面積を増大させ、地域を代表する権力者となり有岡地区を中心に数多くの墳墓を築くようになるが、古墳時代を迎えるこの地の勢力は更に発展を続けていた。旧練兵場遺跡では弥生時代の集落遺構群に古墳時代の集落遺構群が幾重にも重なり、発掘調査の際には遺構の複合状況を把握することが困難と思われる状況が頻繁にみられる。

この頃の集落城は市街地から北方と東方に広がりを見せ、市街地の南西部の丘陵部が基城と推定されている。この地区の古墳は確認されているだけでも400基を超えており、中でも香色山・筆ノ山・我押山で北部を、大麻山で南部を限られた弘田川流域の有岡地区は前方後円墳が集中する地域として有名である。

まず古段階の古墳としては、大麻山山麓中でも比較的高所を中心に大麻山椀塚、大麻山経塚、野田院古墳、御忌林古墳、大窪塚古墳、丸山1号・2号墳など数多くの積石塚が築かれているが、御忌林と丸山2号墳以外は全て前方後円墳であり、積石塚古墳分布範囲の最西限に位置している点でも注目できる。中でも野田院古墳は大麻山北西麓(標高405m)のテラス状平坦部という全國的にも有数の高所に立地する丸龜平野最古段階の前方後円墳で、前方部は盛り土、後円部は積石塚で構築されている。

また、有岡地区の平地部分には、前期から後期にかけての多数の前方後円墳が直線的に並んで築かれている。北東から南西方向に順に生野鐘子塚古墳(消滅)・磨白山古墳・鶴が峰2号墳(消滅)・鶴が峰4号墳・丸山古墳・王墓山古墳・菊塚古墳が知られており、その状況から同一系譜上の首長墓群と考えられているが、中でもその中央の小丘陵上に築かれた王墓山古墳は一際目を引く存在である。

古墳時代後期末になると大麻山山麓部の至る所に群集墳が出現する。現存する群集墳の中には線刻画で装飾された横穴式石室が計8基確認されており、それらが共通モチーフを有している点は大変興味深い。宮が尾古墳もそのひとつである。線刻画ではそのモチーフの正体を把握しにくいものが多いが、宮が尾古墳には、周辺の装飾古墳と共にモチーフの他、人物群や船、騎馬人物が具象的に描かれており、装飾古墳を考え上で極めて貴重な存在と考えられている。

この頃の丸龜平野は金倉川の東が那珂郡、西が多度郡と呼ばれており、多度郡には佐伯一族が勢力をもっており、有岡一帯の前方後円墳群についても佐伯の一代系譜の墓とする考えが有力である。

やがて仏教の伝来に伴い、白鳳期には佐伯の氏寺である伝導寺(仲村寺)が旧練兵場遺跡の一角に建立される。しかしながらこの寺は短期間で消滅してしまい、後に500m程南に移転されたものが現在の善通寺伽藍ではないかと考えられている。

奈良時代末、宝亀五年(774)この地の有力豪族であった佐伯氏に弘法大師が誕生する。平安初期、大同二年(807)に唐から帰朝した大師が、長安の青竜寺を模して今の伽藍の場所に真言宗最初の根本道場として善通寺を建立した。創建当時は西町四方の境内に金堂や大塔、講堂、法華堂、西塔、護摩堂の他、四十九の僧房があったといわれているが、平安時代末頃から鎌倉時代、そして南北朝時代にかけては、社会環境の大きな変化に伴い幾度も荒廃の危機に曝された。これを反映するように、善通寺の西側に隣接する香色山山頂では平安時代末頃の経塚群が確認されている。末法思想を背景として、この地に活動の基盤とした貴族(佐伯)や善通寺の僧侶達が造り上げたものであるが、中には子孫のために經筒などの埋納場所を事前に確保しておいたとみられる上下二段構造の経塚(香色山1号経塚)が1997年夏に確認され注目を集めた。

善通寺は戦国時代、永禄元年(1558)には香川・三好同盟の戦火により焼失してしまう。その後復興が始まるのは、やがて江戸時代に徳川幕府が封壇制度を確立してからのことであるが、四隅八十八カ所巡礼や金毘羅参りが全国的な信仰行事となるのはこの頃からであり、八十八カ寺のうち五カ寺がある善通寺市は善通寺を中心に門前町として活気を取り戻す。

明治29年には第十一師団が設置され、門前町に軍都としての性格を帯びるようになつたが、このため道路や鉄道が整備された。この頃建設された洋風デザインの建造物群は市街地に今も多数残され、独特の景観を呈している。

これにより善通寺町として都市化が始まり、昭和29年3月31日に竜川村・与北村・筆箇村・吉原村との合併により市制が施行され、善通寺市が誕生した。

参考文献

『善通寺市の古代文化』	矢原高幸・善通寺市	1973年11月
『善通寺市史・第一巻』	善通寺市	1977年7月
『中の池遺跡発掘調査報告書』	九鬼市教育委員会	1982年3月
『香川叢書・考古篇』	香川県教育委員会	1983年3月
『王墓山古墳調査概報』	善通寺市教育委員会	1983年3月
『五条遺跡発掘調査報告書』	善通寺市教育委員会	1983年11月
『仲村磨寺発掘調査報告書』	善通寺市教育委員会	1984年3月
『彼ノ宗遺跡』	善通寺市教育委員会	1985年3月
『仙遊遺跡発掘調査報告書』	善通寺市教育委員会	1986年3月
『九頭神遺跡発掘調査報告書』	善通寺市教育委員会	1988年3月
『福木遺跡』	福木遺跡発掘調査会	1989年3月
『仲村磨寺』	善通寺市教育委員会	1989年3月

『史跡有岡古墳群(王墓山古墳)保存整備事業報告書』	善通寺市教育委員会	1992年3月
『史跡有岡古墳群(宮が尾古墳)保存整備事業報告書』	善通寺市教育委員会	1997年3月
『御館神社古墳発掘調査報告書』	善通寺市教育委員会 ～善通寺市内遺跡発掘調査事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書1～	1993年3月
『春龍古墳調査報告書』	善通寺市教育委員会 ～善通寺市内遺跡発掘調査事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書2～	1994年3月
『九頭神遺跡・宮が尾古墳隣接地調査報告書』	善通寺市教育委員会 ～善通寺市内遺跡発掘調査事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書3～	1995年3月
『香色山山頂遺跡群調査報告書』	善通寺市教育委員会 ～善通寺市内遺跡発掘調査事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書4～	1996年3月
『山南遺跡・後ノ室遺跡調査報告書』	善通寺市教育委員会 ～善通寺市内遺跡発掘調査事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書5～	1999年3月
四国横断自動車道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査実績報告書		
第一冊 『中村・乾・上一坊遺跡』	香川県教育委員会	1987年3月
第三冊 『矢ノ塚遺跡』	香川県教育委員会	1987年10月
第六冊 『植木遺跡』	香川県教育委員会	1989年3月
第九冊 『永井遺跡』	香川県教育委員会	1990年12月

第二章 鉢伏山北東麓遺跡群

①丘陵部での調査概要と遺構及び遺物

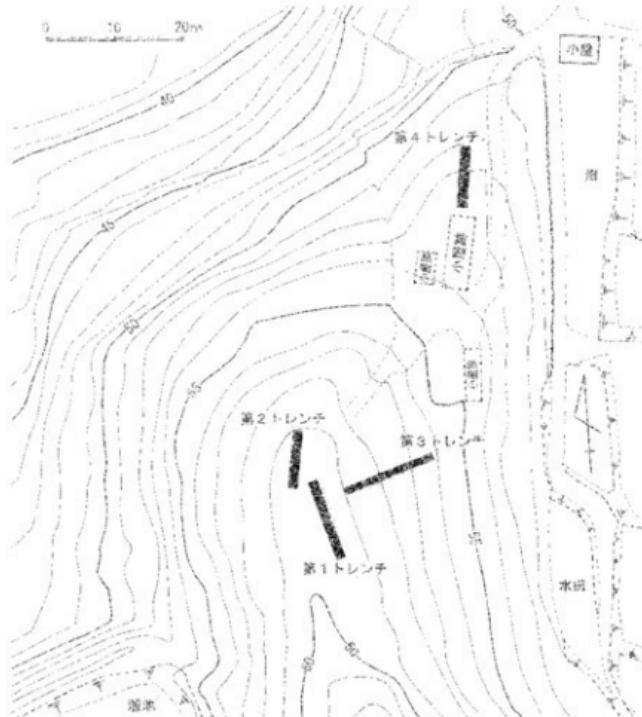
鉢伏山は善通寺市街地東方の与北町から櫛梨町にまたがる低丘陵で与北山とも呼ばれている。規模は南西-北東方向に 1.3 km、北西-南東方向に 0.8 km 程と小規模な山塊で、標高は 127.4m を測るが、周囲の平野部でも標高 35~40m 程度と、実際の標高はわずかであるため周囲は古くから畑や住宅地として利用されている。この南には浅い谷を隔てて同規模の山塊、如意山(櫛梨山)が並ぶ。如意山の南側には神櫛王を祀る延喜式内神櫛神社が鎮座している。

鉢伏山は沖積平野の中にある独立低丘陵であるため、人の生活の痕跡が多く残る。まず山頂では明治 34 年に四獸鏡鏡 1 面・石鉤 1 点・鐵鏃 1 点が発見され、現在東京国立博物館に保管されている。如意山に面する本山の南端では昭和 17 年に平形銅劍が 3 口発見されており、善通寺市立郷土館に所蔵されている。山の北東尾根上では、善通寺市の浄水場建設

に伴い実施された昭和 53 年の調査で 2 基の竪穴式石室が発見されており、出土した小銅鏡や歎斧・ガラス玉などから 4 世紀後半頃に位置づけられている。

また、この山は長曾我部元親の軍勢が長尾大謙守の軍勢と戦った際に一時的な陣営としたという伝承から「陣山」とも呼ばれるが、城の遺構は南の櫛梨山に残っており、これと混同している可能性が高い。

さて、この鉢伏山の北東麓の広範囲を利用して多目的屋外競技場の建設が計画されたの



第3図 丘陵部の地形及びトレンチ配置図

は平成9年のことである。そしてこの計画に併せて山麓部を造成しての市民ふれあい公園の建設計画も加えられたが、この山では前述した遺跡の他にも数箇所で弥生時代中期の土器や石器の散布も確認されていた。開発予定範囲は局知の散布地等ではなかったが、現地踏査を実施したところ公園予定地内で弥生土器やサヌカイト・須恵器の破片が僅かに確認された。そこで市有地化を待ち、平成12年5月18日から試掘調査を開始した。

事前踏査の際に確認された遺物は全て公園予定地西端の、南から北に延びる尾根の東斜面部での表面採取であったため、この尾根を中心トレンチを設定して掘削調査を実施した。この尾根上への進入道は狭く重機等の使用ができないため、掘削及び埋め戻し作業は全て人力で行った。

第1トレンチ 調査区内の尾根最上部に尾根方向に沿って南北方向に幅1.5m、長さ11.5mのトレンチを設定した。腐食土を除去し掘削を開始すると地表面下20~30cm程で、黄褐色の花崗岩風化層に達したが、遺構は存在しておらず遺物も皆無であった。何らかの遺構が存在していたことを示すものか、直径2~3cm程度の円錐(砂岩)が数個出土しているが、当該地は焼として開墾された痕跡が認められたため、後世の混入である可能性も否定できない。

第2トレンチ 次に第1トレンチの北側の比較的平坦な場所に幅1.5m、長さ8mのトレンチを設定したが、調査の結果は第1トレンチと全く同様である。

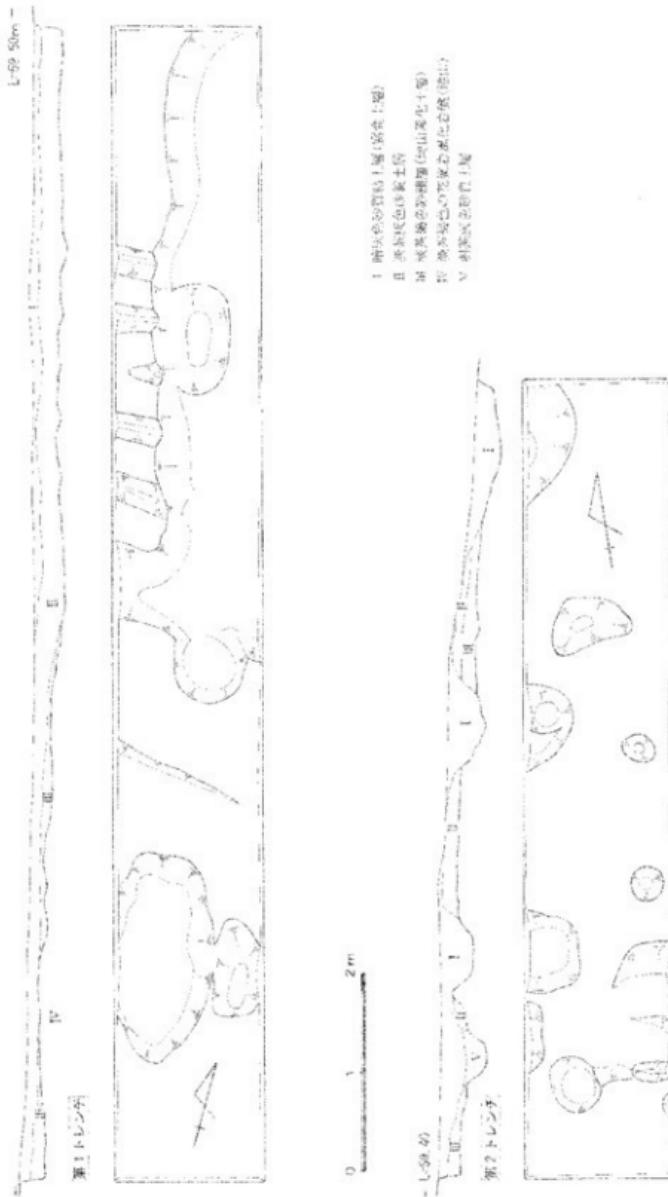
第3トレンチ 尾根上では遺構が全く検出されなかつたため、次に遺物が多く表面採取された尾根の東斜面に幅1m、長さ13.5mのトレンチを設定したが、ここでも掘削によつて近世陶磁器類の破片が僅かに出土しただけであり、表面採取された時期の遺物や遺構は全く検出されていない。

第4トレンチ 尾根上は殆どの場所に開墾の痕跡が認められたため、最もその痕跡の軽微な場所を探し、第1~3トレンチを設定した場所から北に約40m程下った尾根上に幅1.5m、長さ8.8mのトレンチを設定した。ここは他の調査区とは異なり、地山上に厚く客土した上面が畑とされていたため唯一の遺構と遺物が確認できた。

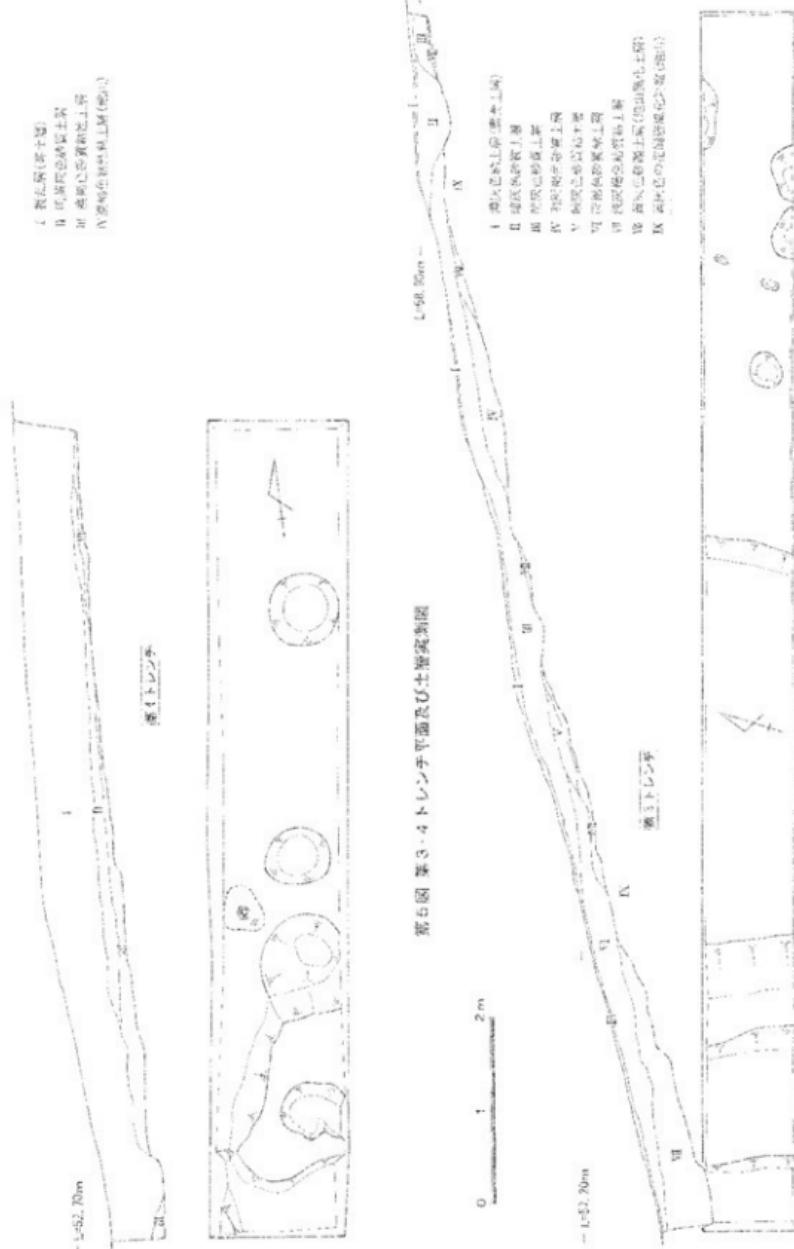
ここでは地表面下約60cmが客土層で、この下に堆積した厚さ15cm程の砂質粘土層下の粘土層中から小型の壺形土器が出土した。遺物が出土した粘土層下は地山で、小型土器が出土した範囲のみがやや盛り、南北に50cm、東西に40cm、深さ10cm程の土坑状の形状を呈していた。土器は焼きが甘いようで、周囲の粘土と同様の状態で、形を保つて取り上げることができなかつたが、直径約10cm、高さ約7cmの扁平な体部を有する壺形土器である。首部は失われているようで、小さな石英粒を含む褐色の胎土で器壁の厚さは7~8mm、底部はやや突出ぎみの平底である。一緒に紡錘形を呈する暗灰色の変成岩が出土したが、こちらも軟質化しており、加工痕などは全く確認できていない。

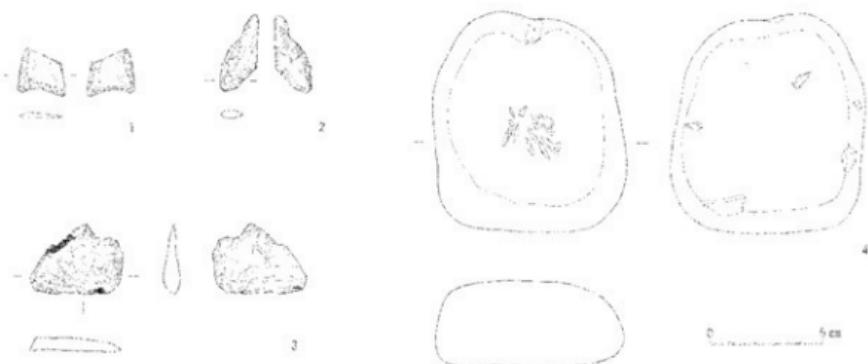
丘陵部では公園工事の造成の対象となる範囲は尾根が中心であり、その他は自然地形を

第4図 第1・2トレンチ平面及び土壤剖面図

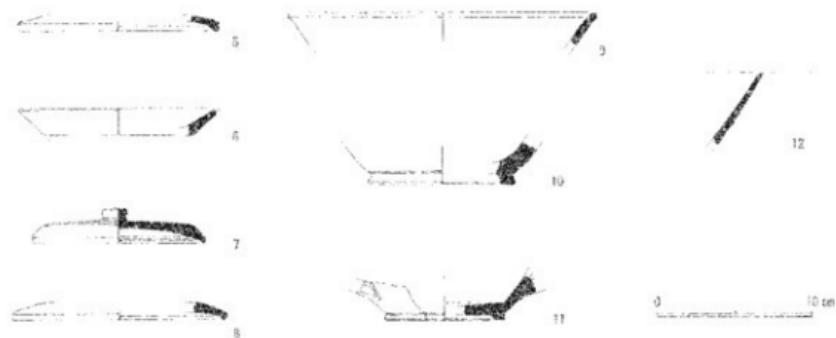


第五圖 第3-4トレンチ平面及び土層実測圖





第6図 丘陵部表探石器実測図

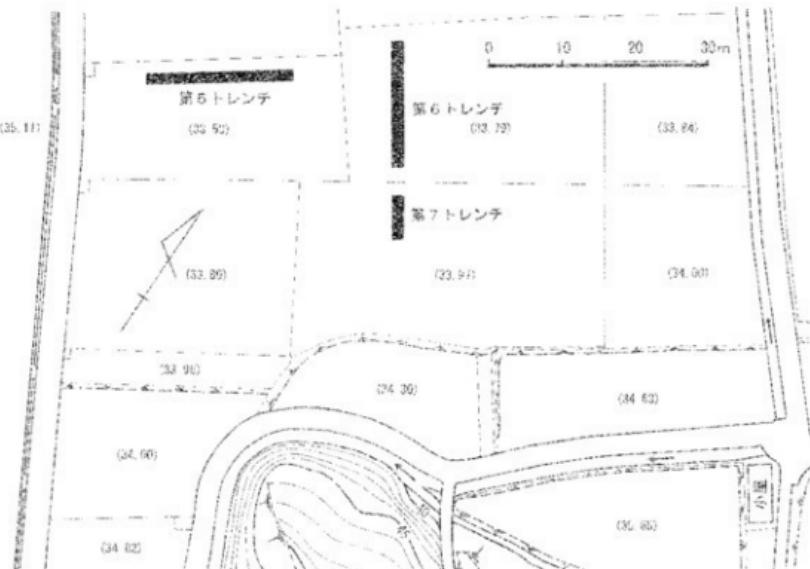


第7図 丘陵部表須恵器実測図

利用しての整備計画である。そこで尾根部を中心とした試掘調査終了後、丘陵部を下り、北東麓部の水田中において多目的屋外競技場の建設用地内での試掘調査を実施した。

②山麓部での調査概要と遺構及び遺物

ここでは遺物等は全く確認されていないが、競技場建設に伴い切土工事が計画されている水田中にトレーンチを設定して、遺構の確認調査を行った。



第8図 山麓部の地形及びトレーンチ配置図 【()は水田耕作面等の平均レベル】

第5トレーンチ 山裾部は開墾による削平が著しいと考えられるため、現地形における尾根から平地への変化点から80m程北側の水田中に入った場所に東西方向に幅1.5m、長さ約20mのトレーンチを設定し、重機を使用した掘削作業を開始した。

厚さ約20cmの耕作土下は12cm程の整地層となり、地表面下30cmを越えると至るところに突出した円礫層が姿を現した。円礫は10~15cm程度のものばかりで、突出部は河川の氾濫の際に形成された自然堤防と思われる。

遺構は全く検出できておらず、この礫層上面から弥生時代前期の土器片(甕の底部)が数点出土したがその数は希少で、壊滅したものばかりである。

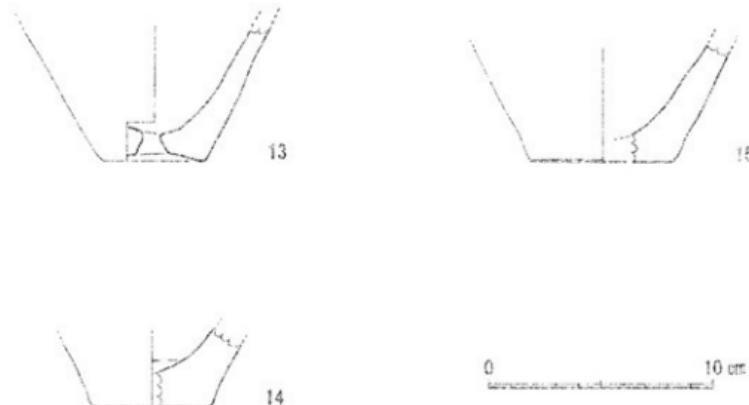
第6トレーンチ 第5トレーンチを設定した水田の東側水田中に、今度は南北方位に幅1.5

第9図 第5、6、7トレンチ土層実測図



m.長さ18mのトレンチを設定したが、第1トレンチ同様、地表面下約40cmで疊層となり、遺構は確認できていない。また遺物も疊層上から弥生土器碎片が数点出土しただけである。

第7トレンチ 第6トレンチの南側水田中において第6トレンチの延長線上に幅1.5m、長さ5.5mのトレンチを設定したが、第1・2トレンチ同様、地表面下約40cmで疊層となり、遺構は確認できていない。また遺物は全く出土していない。



第10図 第5トレンチ出土弥生土器実測図

③小 結

鉢伏山は弥生時代以降の様々な遺跡が所在し各時代の遺物も出土することが知られている。特に北東麓遺跡群のうち丘陵部での調査地では、事前踏査で弥生土器やサヌカイト・須恵器の破片が採取されており、しかもトレンチを設定した尾根は平野部を一望にできる環境にあったことから、何らかの遺構の検出が期待できたが、意外にも掘削調査によつて検出された遺構は尾根下方の土坑状遺構(SX-01)唯一であった。

踏査の際に尾根東側斜面で採取された遺物は、当初は人の生活の場があったことを示していると思われるが、この地に長く住み続け、生活の中心を斜面から平地に徐々に移動する中で尾根の開墾が進んだ結果、生活遺構等が消滅したのではないかと推定できる。

また山麓部一帯は弥生時代前期頃までは比較的規模の大きな河川の氾濫が及んでおり、余り生活に適した場所ではなかったことが解る。そのためにこの頃の生活の場が南の尾根上にあったものと考えられる。自然堤防状の礫群の堆積状況と遺物の出土状況などから見ると、この頃には氾濫が落ち着き、流れの跡が徐々に埋まりつつある状態であったと考え

られるが、この場所に反乱をもたらしたのは土器川からの旧流路か、金倉川からの旧流路かは不明であるが、航空写真に見える旧流路を辿ると、金倉川によるものである可能性が高い。いずれにせよ、両河川共に南から北に下る流れであり、この山の北側には川の流れを変えるような高まりは無く、東西方向に長い山塊の北麓部まで及ぶ大きな川の流路の存在は理解し難い。

この点については、平野部においても長い歴史の中で開墾に伴う地形の改変が行われた可能性を考える必要もあり、今後の付近の調査等によってより多くの情報が加えられることで解明されることを期待したい。

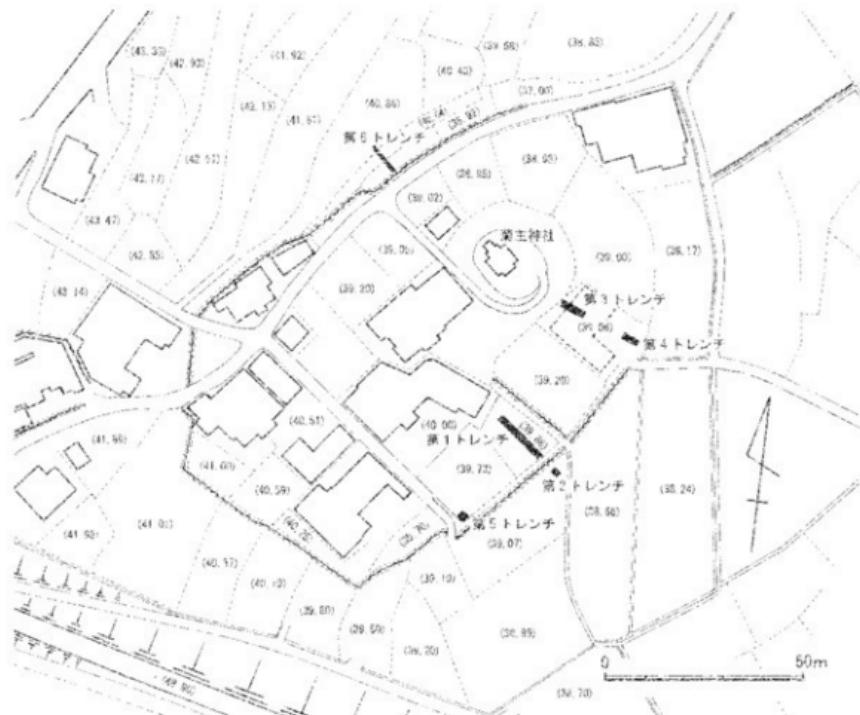
第三章 菊塚古墳

①調査の概要と遺構及び遺物

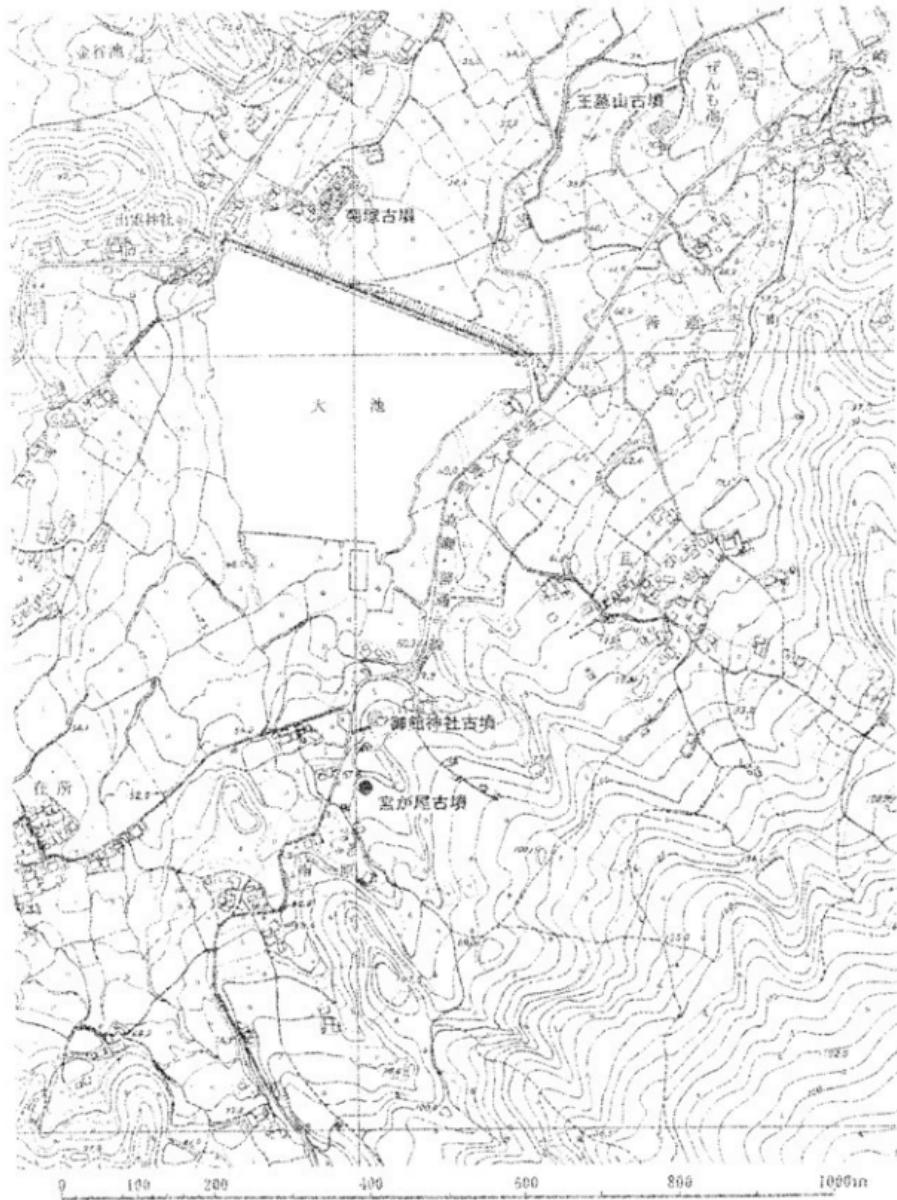
善通寺市街地から南西には有岡の里と呼ばれる低丘陵地帯が広がる。有岡は弘田川上流域で、この地を治めた歴代の首長の前方後円墳が集中する地域として有名である。この地は古代から聖域視されていたようで、集落遺跡等が極めて少ない反面、青銅器埋納遺跡や祭祀遺跡、そして400基を超える古墳の存在が知られている。

有岡の里は香色山・筆ノ山・我持師山で北部から西部を、そして南部を大麻山で限られているため、西の平野部(集落域)方向だけが開く地形となっている。その山々の尾根上には前期古墳が点在し、標高80~50mの山裾部には後期から終末期の群集墳が葬っている。また、丘陵の中央部の小丘陵上を中心に多数の前方後円墳が残されている。

菊塚古墳はこの前方後円墳群のうち最も西に位置しており、丘陵上ではなく平地に独立して構築されている。開墾や住宅の建設に伴い墳丘の大部分は消滅しており、菊理姫命を



第11図 菊塚古墳及び周辺地形及びトレンチ配置図【()内は水田耕作面等の平均レベル】



第12圖 菊塚古墳周辺主要古墳位置図

祀る菊主神社のある後円部だけが辛うじて残されている状態であるが、航空写真や地形図を見ると、古墳周囲の周濠若しくは周庭帯の跡と見られる地割がはっきりと見える。この部分は墳丘南側では西から東に向かって階段状に低くなっている、その比高差は最大で70cmを測る。墳丘の主軸は南西～北東方位を向いている。

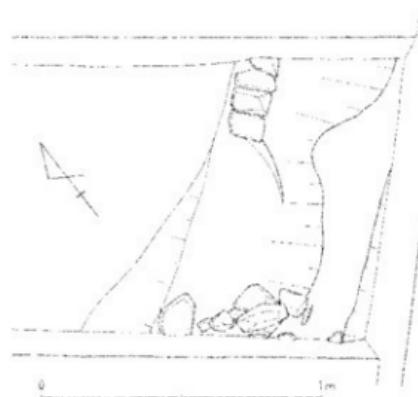
全長は推定で55m前後、後円部の直径は約35m、周囲の周濠若しくは周庭帯の全長は約90m、幅は約70mを測る大きなもので、後円部頂上部の菊主神社境内には石室の天井石と見られる巨大な石材が露出しており、これまでに調査が実施されたことは無いが、主体部が横穴式石室と考える研究者も少なくない。

この有岡地区の水田域は緩やかな傾斜地にあるため、近年は場整備が盛んに行われており、平成12年度事業として菊塚古墳周辺での工事が計画された。古墳周辺の工事は水田の畦や水路の改修程度であり現存する墳丘への影響は無いが、周濠若しくは周庭帯の跡と見られる地割への影響が考えられたため、遺構を確認し適切に保存する目的での試掘調査を平成13年6月12日から着手し、墳丘北西側では道路や水路が周濠若しくは周庭帯の跡と見られる地割内にあることから、試掘調査は墳丘南東側の水田を中心に実施した。ここでは重機は用いず、人力での掘削と埋め戻し作業を行った。

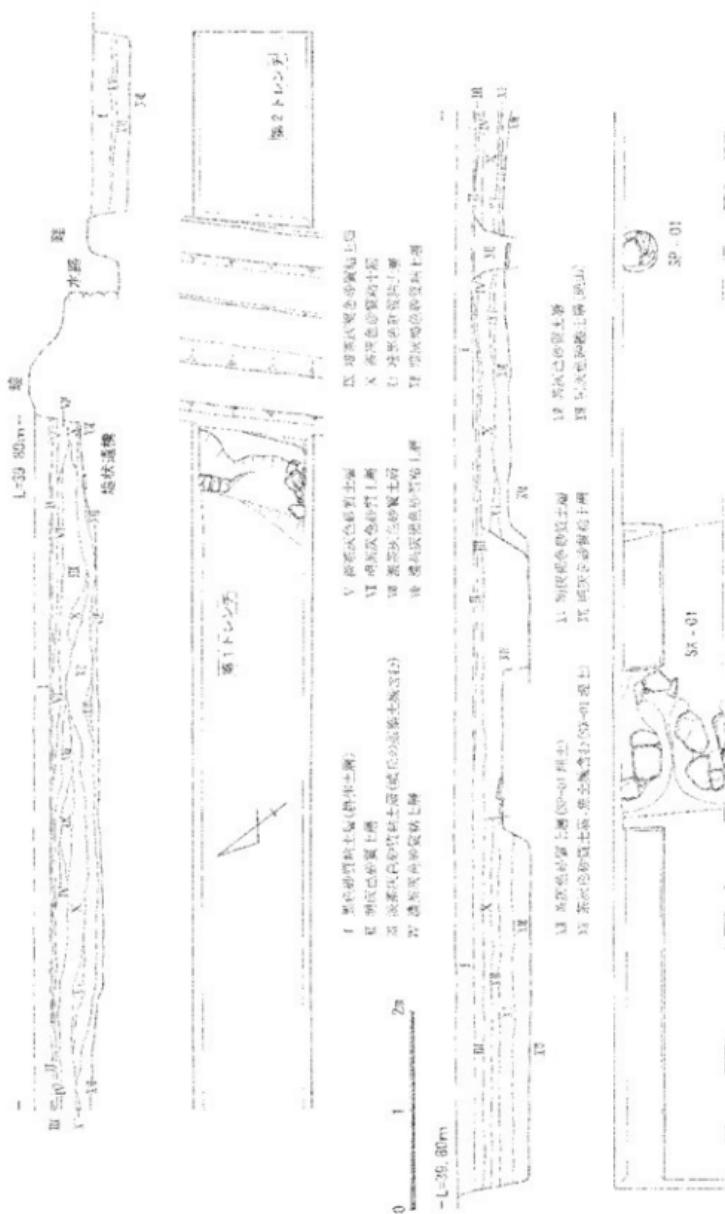
第1トレンチ 墳丘周辺の代表断面を得ることを目的に、前方部の南東側に幅1m、長さ14.5mのトレンチを設定し掘削を開始した。現在残る地割から見て、周濠若しくは周庭帯の端を示す遺構はトレンチの南東端の畦の下に埋没していると予想されたため、畦部分においても小トレンチを設定した。

周濠若しくは周庭帯の跡と見られていた地割内は大半が地表面下55～60cm程度で地山に達した。多少の起伏はあるもののほぼ平らな地形であることから、周濠ではなく周庭帯

であると見られる。トレンチ北西端は宅地であり周庭帯から墳丘への変化点は確認できていないが、トレンチ南東端では畦付近において畦と同じ方位の20cm程の畦状の遺構が検出された。ここでは部分的に10～15cm程度の安山岩が人為的に並んだ状態で検出されており、周庭帯の南端を示す遺構である可能性が高いが、遺物は耕作土内から近世陶磁器の碎片が僅かに出土、また周庭部埋土中から弥生土器片が1点出土しただけであり、古墳に伴うと見られる遺物は全く出土していない。



第13図 第1トレンチ南東端畦状遺構平面図

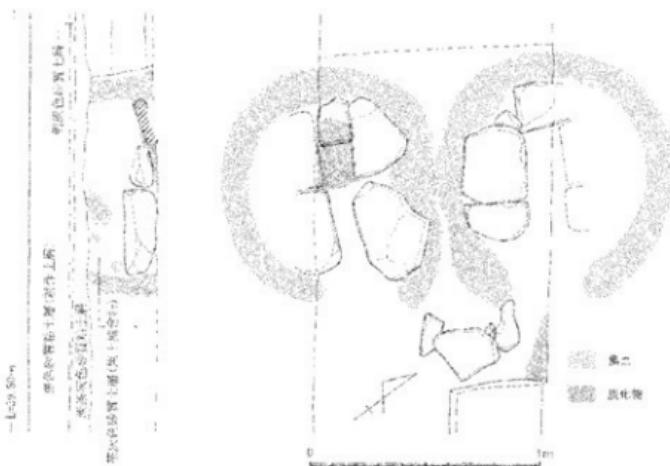


卷之十四

第1トレンチ内では江戸から明治時代頃の所産と考えられる砂糖甕跡も検出されている。県内での砂糖の生産は西讃地区を中心として善通寺市内での砂糖生産は伝わらないので、小規模に個人で営んだものと思われる。

第15図 第1トレンチ
出土弥生土器実測図

第2トレンチ 第1トレンチを南東に延長する形で、南東隣の水田内に幅1.5m、長さ2mの小規模なトレンチを設定した。トレンチ内は地表面下約20cmで水平な地山となったが、この面は第1トレンチで検出された周庭部分の面より15cm程低く、遺物は全く出土していない。

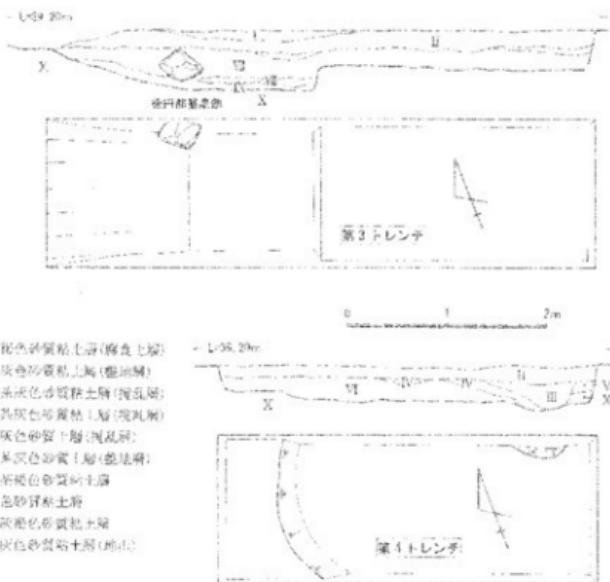


第16回 SX-01(砂糖蜜)実測図

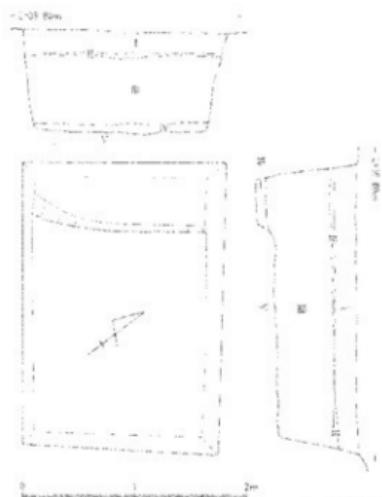
第3トレーナー 後円部南東側は宅地跡で、後円部裾部に幅1.2m、長さ6.3mのトレーナーを設定した。トレーナーの北西端では後円部の基底部と見られる地山の削り出しが確認でき、ここでも遺物は全く出土していない。

第4トレンチ 後円部南東側で後円部裾部に設定した第3トレンチの延長上、周庭帯部分に幅1.2m、長さ4mのトレンチを設定したが、擾乱が著しく第1トレンチで確認されたような畦状の構造は確認できていない。また遺物も全く出土していない。

第5トレーニング 周囲帯部の南端コーナー部分に幅2m、長さ2mのトレーニングを設定した。ここは周囲帯内の現地形では最も高い部位で地表面下80cmで地山面に達したが、他のトレーニング



第17図 第3・4トレンチ平面及び土層実測図

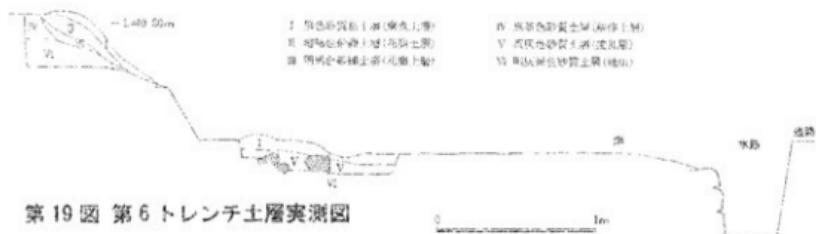


第18図 第5トレンチ
平面及び土層実測図

ンチとは異なり、地山上に 55cm の厚さで黒色・淡茶色・灰白色のブロック状の粘土が堆積していた。その状況等から、壙丘を削った上で低い場所を埋め造成した痕跡と思われるが、その行為が行われた時期等については、付近の古者に聞き取りを行ったが不明である。

検出範囲の北西端では周庭帯のコーナーに沿って変化する縫みが検出されており、周庭帯の端部を示す遺構の可能性が高いが、極めて狭い範囲内での検出例であり、確証は得られていない。

第6トレンチ 墳丘北西側は道路や水路が周庭帯の跡を通り、小規模な多数の窓によつて分断されているため発掘調査の実施は困難と判断されたが、南西側との比較を行うために、後円部の北西側で行われたほ場整備の準備工事個所の掘削部分を精査し第6トレンチと併せて断面地形の測量を行ったが、遺物や明確な遺構は確認できていない。



第19図 第6トレンチ土層実測図

②小 結

今回の調査によって、菊塚古墳を取り巻く地割は周庭帯であり、現況地形は南西から北東に下る地形となっているが周庭帯部分は平坦な地形であったことが確認できた。また、本墳は傾斜地に主軸方位を等高線に沿って構築されている。従って墳丘の北西側の周庭帯部は土地を深く削り出して整形されているため、周庭帯の北西側に沿って段丘状地形が認められる。同様に古墳の規模や形状は現在見えている畦や地形に反映されていると考えてよいであろう。

今回は墳丘部分の調査は実施していないが、一箇所だけ後円部の基底部が確認できたことで、周庭部の形状や後円部の現況などからその直徑が38m前



第20図 後円部南西側断面図

後であることも判明した。

しかしながら、古墳に伴うと見られる遺物の出土は皆無であり、埴輪を持たないと判断されることから6世紀後半代の築造である可能性がある。

さて、今回の調査はほ場整備に伴う墳丘周囲の遺構確認を目的としたものであり、得られた資料も少ないが、菊塚古墳が善通寺市周辺は勿論のこと、讃岐古代史を考える上で極めて重要な古墳であることは疑いなく、今後は主体部を含めた詳細な発掘調査が行われることでこの古墳の歴史的な位置づけによって正しく評価され、適切な保存が行われることを期待してやまない。

図 版



第 21 図 鉢伏山北東麓遺跡群(尾根部)調査地全景(北東から)～調査前の状況～



第 22 図 第 1 トレンチ掘削作業風景(北から)



第23図 第1トレンチ完掘状況(南東から)



第24図 第2トレンチ完掘状況(南東から)



第25図 第3トレンチ完掘状況(北西から)



第26図 第4トレンチ完掘状況(南から)



第27図 第4トレンチ SX-01 検出状況(北から)



第28図 鉢伏山北東麓遺跡群(山麓部)調査地全景(北から)～調査前の状況～



第29図 第5トレンチ掘削作業風景(東から)



第30図 第5トレンチ完掘状況(西から)



第31図 第6トレンチ完掘状況(南から)



第32図 第7トレンチ完掘状況(北西から)



第33図 第1トレンチ掘削作業風景：南東側周庭部（南西）から後円部を望む



第34図 第1トレンチ完掘状況（南西から）



第35図 第1トレンチ南東端の畦状遺構検出状況と第2トレンチ(北西から)



第36図 第1トレンチ SX-01:砂糖甕検出状況(南西から)



第37図 第3トレンチ完掘状況(南から)



第38図 第4トレンチ完掘状況(南から)



第39図 第5トレンチ完掘状況(南から)



第40図 第6トレンチ完掘状況(南東から)

抄 錄

ふりがな	はちぶせやまほくとうろくいせきぐん・きくづかこふんはくつちょうさほうこくしょ							
書名	鉢伏山北東麓遺跡群・菊塚古墳発掘調査報告書							
副書名	～善通寺市内遺跡発掘調査事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書6～							
卷次	6							
シリーズ名	善通寺市内遺跡発掘調査事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ番号	6							
編著者名	笹川龍一							
編集機関	善通寺市教育委員会 文化振興室							
所在地	〒765-0013 香川県善通寺市文京町二丁目1番4号							
発行年月日	西暦2001年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	所在地	コード番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因	
	市町村	遺跡番号						
はちぶせやまほくとう 鉢伏山北東 ろくいせきぐん 麓遺跡群	善通寺市 与北町 (鉢伏山北東丘陵部)	37204	—	34度 13分 30秒	133度 48分 21秒	20000518 ～ 20000525	69m ²	善通寺 市内遺跡 調査事業 (遺跡確認 調査事業)
きくづかこふん 菊塚古墳	善通寺市 善通寺町 字大池東		—	34度 13分 36秒	133度 48分 19秒	20000525 ～ 20000529	65m ²	
				34度 12分 38秒	133度 12分 38秒	20000612 ～ 20000718	35m ²	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
はちぶせやまほくとう 鉢伏山北東	(丘陵部) 散布地	弥生時代前期 中世	土坑	弥生土器 石器 須恵器	事前踏査では弥生時代から 中世頃の遺物の散布が確認 できたが、明確な遺構は全 く検出できなかった。			
ろくいせきぐん 麓遺跡群	(山麓部) 散布地	弥生時代前期	なし	弥生土器	氾濫原から弥生時代前期の 土器が数点出土したが、遺 構は確認できていない。			
きくづかこふん 菊塚古墳	古墳	古墳時代中期	古墳の周庭帯 砂糖甕(近世)	弥生土器 近世陶磁器	中期の周庭帯を有する古墳 であるが、住宅建設等に伴 い墳丘の大半が消滅してい る。今回の調査では墳丘の 規模や周庭帯の範囲が確認 できた程度である。			

鉢伏山北東麓遺跡群・第壕古墳発掘調査報告書
～善通寺市内遺跡発掘調査事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書6～

平成13年3月31日発行

編集 香川県善通寺市文京町2-1-4
発行 善通寺市教育委員会 文化振興室

印刷 (有)小国印刷